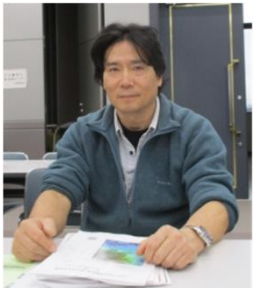
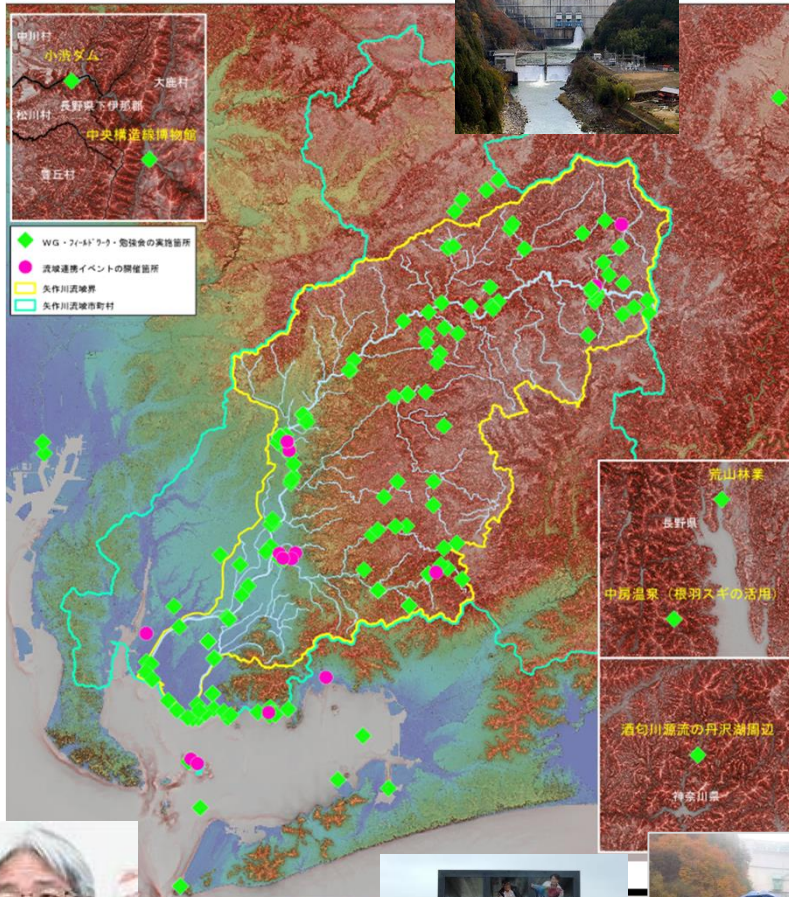


矢作川流域圏懇談会 矢作川流域の50年と未来を語る



矢作川流域圏懇談会(2010.8月～)と担い手づくり事例集調査(2013～現在)への継承

元々様々な流域活動が展開されてきた矢作川であるが、(国交省)豊橋河川事務所が流域一体となった取組み、課題解決を目指して2010年8月に「矢作川流域圏懇談会」を設立する。これは、2009年7月に策定された矢作川水系河川整備計画に位置付けられたもので、流域圏における様々な課題のほとんどが国や県の管理する河川区域内で解決できるものではなく、山から海に至るまで様々なセクターが関わり、議論する必要があることから提唱された場である(座長:辻本哲郎氏)。2020年現在では、90組織(セクター)、約400名に及ぶメンバーが参加する。

伊勢湾チームからは、まず2011年度に愛知県環境部から建設部河川課にトレードされた清水雅子(マーガレット)が川部会に参戦、会議ばかりだった設立当初から転換し「これではダメだ、みんなで現場に行こう」と開催された「矢作川全てのバスツアー」(2011年9月23日～24日)での説明役も担う。このツアーは、懇談会全体としても大きな意義をもたらしたという。



2011年9月「矢作川全てのバスツアー」開催

山部会のマーガレット&カルメン、藏治座長 根羽村での今村豊氏(左端)



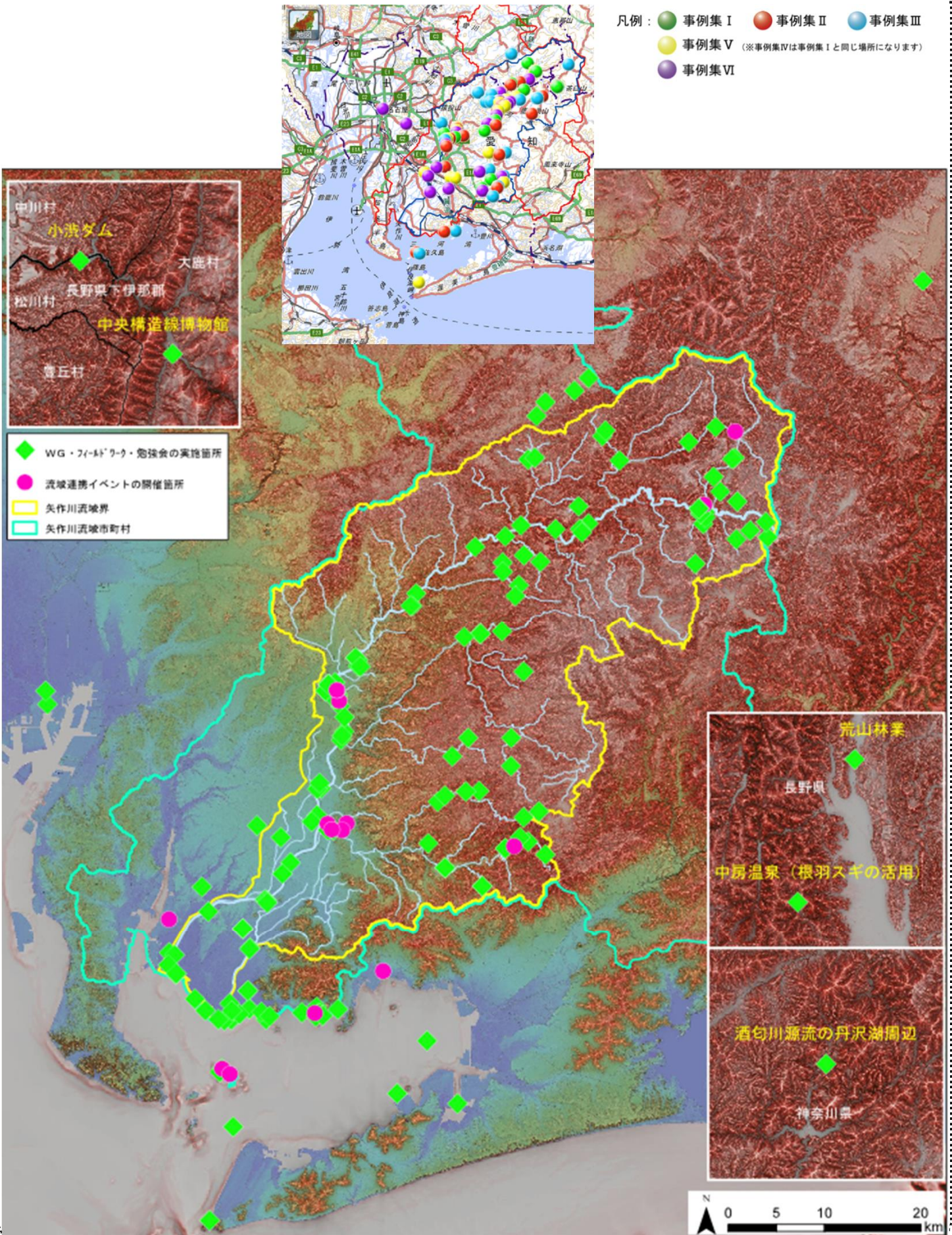
さらに清水と近藤は、洲崎燈子(カルメン)から泊りの山部会に誘われ、2012年8月の根羽村でのワーキングから参加することとなった。ここで驚いたのは、根羽村森林組合のメンバーたちで、今村豊氏、南木一美氏他、多くの若者たちが都市・遠隔地からのIターンなどで来ていることを知り、伊勢湾4期調査の郡上市などを彷彿させた。これは根羽だけでなく他の矢作川流域圏でも起きていることを、2013年度から始めた「山村再生担い手づくり事例集」調査で知ることとなる。この調査にあたっては、旧知の丹羽健司(ニワケン)から、近藤、浜口美穂氏に協力要請をいただいたもの。第5期調査(2011)で消化不良だった矢作川流域であるが、この後現在に至るまでがっぷりと向き合うこととなった。

矢作川流域圏での担い手づくり事例集調査(2013～2018年度)

矢作川流域圏懇談会の山部会では、山村再生担い手づくり事例集調査(2013年度～2015年度)で64団体、2016年度は山村Ⅰ期調査17団体のフォローアップ聞き取りを行い「その後いかがお過ごしですかプロジェクト」を展開、2017～2018年度にかけては、山村だけでなく川、海まで広げた流域圏再生担い手づくり事例集調査(38団体)に転換、全体としては102団体・個人の取材を行った(以下)。なお、2017年からは「事例集交流会」を開催し、根羽村(2017年)、西尾市佐久島(2018年)、岡崎市(2019年)へと繋ぎ、交流と連携の場を創る。

担い手プロジェクト	調査時期	調査団体	主な調査団体など
山村再生Ⅰ	2013年度	21団体	森林組合(根羽、恵南、岡崎)、串原林業、奥矢作森林塾、福寿の里、とよた都市農山村NW、矢森協、旭木の駅P、M-easy、猟踊会
山村再生Ⅱ	2014年度	21団体	木の駅ねばりん、あさひ若者会、新盛里山交流塾、こいけやC、矢作川森林塾、矢作川水族館、宮ザキ園、東幡豆漁協、佐久島もんぺまるけ
山村再生Ⅲ	2015年度	22団体	飯伊森林組合、天下杉、おいでん・さんそんC、あさひ森の健康診断、額田木の駅P、岡森フォレストーズ、島を美しくつくる会
その後プロジェクト	2016年度		2013年度1期調査17団体の再取材「その後いかがお過ごしですか？」
流域圏Ⅰ	2017年度	19団体	ちんちゃん亭、木かんしゃ、めえープルファーム、里楽暮住しもやま会、天然アユ調査会、橋の下世界音楽祭、岡崎りた、ぬかた体験村
流域圏Ⅱ	2018年度	19団体	天竜川鷺流溪P、つくラッセル、岩本川創遊会、豊田土地改良区資料室、正晴会、奏林舎、岡崎OMM、(故)内藤連三氏、(故)原田裕保氏
合計		102団体	

矢作川流域圏懇談会の活動(2010~2019)マップ、山村再生・流域圏担い手づくり事例集(2013~2018)マップ



矢作川流域圏での運動・活動の歴史と流れを考える ① 公害・矢水協時代

～ 「事例集から見た矢作川流域年表」「矢作川流域圏年表」を読み解く ～

矢作川流域圏での調査(102団体)を通じて、今までの大きな流れを考えてみる。伊勢湾流域圏調査において、名古屋など都市を中心とした活動に「営みの視点が欠ける」と書いたが、矢作川では元々原点となる矢水協の活動が営農者、漁業者の「営み」の視点から始まったものであり、都市部とは背景が大きく異なる。

1960年頃より流域の開発が大きく進み、乱開発により矢作川の白濁化は顕著となる。全国的にも公害問題が深刻化した時代(高度成長期1955～1970頃)。このため水の受益者である農業団体、漁業団体、利水市町村による矢作川沿岸水質保全協議会(矢水協)が設立されたのは1969年のこととなる。

- 主要公害と環境法令の整備／1910年代～イタイイタイ病、1956～熊本水俣病、1960～四日市ぜんそく、1964新潟水俣病、1967公害対策基本法制定、1969矢水協設立、1970(公害国会)水質汚濁防止法制定
- 大規模河川施設の構築／連続性の分断による河川環境、土砂収支の変化、河床アーマー(鎧)化など
1926～百月、越戸など水力発電ダム、1958明治用水頭首工、1970矢作ダム
- 公共事業反対運動／1958～1970先駆けとなる筑後川流域下釜ダム・松原ダム反対運動(蜂の巣城闘争)、1966～新空港建設・成田闘争、1973水源地域対策特別措置法施行(蜂の巣城闘争を受けて)
- 災害等イベント／1955～1970頃 高度成長期、1959伊勢湾台風、1964東京オリンピック、1970大阪万博



1959年9月 伊勢湾台風



1958年～下釜ダム「蜂の巣城闘争」



1970年完成 矢作ダム

【1】1970年代～ 矢水協時代「流域は一つ、運命共同体」の提唱へ

矢水協は、漠然と汚水・濁水をたれ流し続ける開発者に対して毅然と対抗する流域連合体であり、1976年には愛知県との紳士協定を締結、「開発に伴う事前の矢水協協議」をルール化した(=「矢作川方式」)。これは全国的にも例を見ない先進的な取り組みであり、流域内での「環境に配慮した開発のあり方」に大きく寄与した。

50年を経て、開発者に対する監視・指導を続ける矢水協の意義は今なお大きい。2001年に内藤連三事務局長が逝去されたこと、さらに流域圏での水質や環境保全の問題は土砂流出や濁水のみならず多岐に及んできており、新たな課題解決の場が求められている。

- 矢水協による上下流連携の推進と支援体制の確立／
1971矢作川流域開発研究会(矢流研)設立「流域は一つ、運命共同体」を提唱(開発者側組織)、
1973一色町漁協婦人部が「矢作川をきれいにする会」設立、1976豊田市西広瀬小学校児童会が
水質観測開始「矢作川の見張り番」と呼ばれる(～現在まで連続観測継続)、1976愛知県と矢水協が
紳士協定を締結(対決から協調へ)、以降山(平谷村等)と海(一色等)との上下流交流も促進する、
1986開発者(建設業界)による支援組織として矢作川環境技術研究会を設立
1991矢水協の仲介により、根羽村と安城市が「矢作川水源の森」分収育林事業契約を締結
- 流域下水道事業の展開／全国で流域下水道事業への反対運動が展開され、境川はその先鞭となる。
愛知県で最も早く計画されたのは境川であるが、結果的に最初に供用されたのは1980年の豊川流域。
ただし境川流域での反対運動と議論は、全国の流域下水道事業に多大な影響を与えた。
1971境川流域下水道事業認可、1972刈谷市元刈谷地区農地への重金属汚染が発生、
1973境川流域下水道に対して本格的な反対運動始まる、1978愛知県が話し合いの打ち切りを通告、
1981農地に対して行政代執行(土地収用)、1984大幅な計画変更を受入れる(工場排水入れず)、
1989境川浄化センターの供用開始、1992矢作川浄化センターの供用開始
- 災害等イベント／1972札幌(冬季)オリンピック、1972小原・藤岡災害(S47 災害)、1973第1次オイルショック、
1981名古屋オリンピック(1988年夏)誘致失敗、1983頃～三好ヶ丘ニュータウン計画のため境川大改修、
1987国鉄民営化～JRへ、1988頃～バブル経済始まる、1989H元年災害(恵南・東加茂(旭町)豪雨)



矢作川流域圏での運動・活動の歴史と流れを考える ② 近自然時代

～ 「事例集から見た矢作川流域年表」「矢作川流域圏年表」を読み解く ～

【2】1990年～ 近自然時代「川を市民に取り戻そう」(豊田市、矢作川漁協を中心として)

1990年頃からの流れは、豊田市・矢作川漁協などを中心に新しい取組みを創っていく。国(当時建設省)と愛知県が管理する矢作川ながら豊田市は「矢作川環境整備計画を策定すべく1991年2月に検討委員会を設立、1991年夏にヨーロッパの近自然工法、川づくり視察へと向かい、帰国後実践していった。愛知県は矢作川古巣にて水制工群による川づくり、及び河畔林伐採による空間整備も行い、ここは後に「古巣水辺公園」として親しまれることになる。この後豊田市内では、古巣を皮切りにいくつもの水辺愛護会が誕生していった。

「一つの流域には、一つの研究所(博物館)を」との提言により、1994年「豊田市矢作川研究所」が誕生する。当初は豊田市、矢作川漁協、枝下用水土地改良区の利害(相反)関係者が出資する画期的な第3セクターの形態であったが、後に豊田市河川課の一組織となる。研究所もこの時代、センター機能・流域シンクタンク機能を果たし様々な取組み(「古巣プロジェクト」、「天然アユ調査会」等)を展開していた。一方愛護団体は沿川では広がるものの都市域含めた流域全体にまでは及ばない(地先主義)、そもそも行政を含めおじさん達の活動が主体で当初の熱い思い、勢いが衰えていった(継承されない)感は否めない。2001年5月12日に「矢作川・川宣言」と共に始めた矢作川「川会議」が2014年を最後に終結、また我々のシンボルだった「古巣水辺公園」が最近(2018年)閉鎖されたことが極めて象徴的な事件であった。豊田市の市民、漁協、行政が特に熱かった時代は、「矢作川筏下り大会」が開催されていた時期(1987～2006年 20回)とほぼ重なることに気が付いた。偶然ではなからう。



矢作川 古巣水制工・水辺公園



矢作川「川会議」



- 河川法改正へ／1990頃 建設省・関正和氏が「大地の川」「天空の川」を著す
1990 建設省が「多自然型川づくりの推進について」を全国に通達
1991 豊田市矢作川環境整備計画検討委員会設立、同年欧州視察へ
(「ヨーロッパ近自然紀行」新見幾男 参照)
1991～ 愛知県が初の多自然型川づくりとして矢作川・古巣にて水制工群設置、
県河川課は全事務所に対し多自然改修推進を指示・主導する
豊田市は、加納川、太田川、そして児ノ口公園の近自然工事へ
1994～ 愛知県豊田土木事務所は、矢作川に続き籠川、逢妻女川(柳枝工)、
仁王川、市木川、飯野川(魚道)などで多自然型川づくりを展開する
- 1997 河川法改正 治水・利水に加え「河川環境」を目的に追加
1998 東京大学・高橋裕氏「河川にもっと自由を」出版
1999 河川審議会「パートナーシップによる河川管理」提言される
2006 (国)多自然型川づくりから「多自然川づくり」への展開、基本指針策定
- 豊田市、漁協、研究所が主体となった取組み／1993古巣水辺公園愛護会、
1994矢作川研究所設立、1996天然アユ調査会、2001矢作川「川会議」、
2003矢作川「環境漁協宣言」、2006最後の矢作川筏下り大会
- 矢作川水系の河川計画／1998 矢作川河口堰建設事業休止(後に中止)、
2006 岡崎市・額田町合併後、愛知県が男川ダム事業を現整備計画から除外
- 災害等イベント／1991～1993バブル崩壊、1993～2004頃 就職氷河期、
1995阪神・淡路大震災、2000東海豪雨、2001省庁再編、2005愛知万博、
2005郵政解散(小泉政権)、2008 H20年8月末豪雨、2008.9月 リーマンショック、
2009.7月 民主党政権誕生(～2012)、2010(愛知・名古屋)CBD/COP10、
2011 東日本大震災・津波



矢作川筏下り大会 2006

矢作川100年誌
資料研究 2002

～2003年
環境漁協宣言へ



矢作川流域圏での運動・活動の歴史と流れを考える ③ 流域圏の転換期

～ 「事例集から見た矢作川流域年表」、「矢作川流域圏年表」を読み解く ～

- 平成の大合併／1999恵那5森林組合合併、2004恵那市、2005豊田市、2006岡崎市、2011西尾市
- 地域の新たな取組／1996(佐久島)島を美しくつくる会、2000(岡崎)じさんじよの会、2005(岡崎)猫踊会、2006(恵那・串原)奥矢作森林塾、2007(豊田)矢作川水族館(阿部夏丸)、2010(豊田)矢作川森林塾、とよた森林学校、2011(恵那)福寿の里

□ 特にめざましい女性たちの活躍／

- 1990(根羽)天下杉、1999(根羽)ねば杉こ餅、
- 1999佐久島アートプロジェクト(オフィスマッチングモウル)、
- 2004(豊田)とよたプレーパークの会、
- 2005(旭)NPOあさひ・杉ん工房、2006奥矢作森林塾(大島初美)、
- 2007(根羽)きくの会、(豊田)green maman、2009(佐久島)神谷芝保



根羽村・天下杉



(岡崎)オフィスマッチングモウル



佐久島の神谷芝保さん



萩野結の家・梅プロジェクト

- 森の健康診断、木の駅などによる新たな森づくりの展開／2004矢森協・森の健康診断(2005～2014)、2005 原田裕保氏、初代豊田市森林課長に、2011～ 流域圏各地で木の駅、森の健康診断が展開される
- 若者たち、よそ者たちの流入・移住・活動開始／1998(足助)ユースホステル 小川光夫、2001(佐久島)オフィスマッチングモウル(OMM)受託開始、2003 Measy(2009移住)、アンティマキ、2006(岡崎)りた・天野裕、2007串原林業・三宅大輔(U)、2009(根羽村森林組合)今村、南木、(佐久島)もんべまるけ神谷芝保(後に移住)、(旭)戸田移住、2010(稲武)ヒトキ松島夫妻、2011(足助)木かんしゃ庄司、(小原)水澤孝司(2013コレカラ商店)、2012(豊田)橋の下世界音楽祭開始、2014(額田)唐澤晋平夫妻

1990-2010(近自然)時代では、2000年以降後半に広く流域圏内で様々な新しい動きが起きていたことがわかる。とりわけ山村において若者たちなどの移住・流入が始まっていて、その動機は多様であろう。価値観の転換は、国内の経済動向や大規模災害の影響も大きいと思われるが、バブル崩壊や就職氷河期、リーマンショックなどが移住の動機となっているのかどうかはわからない。ただ取材を通して、東日本大震災などを活動の動機としている方々は何人がいらっしまった。(2012橋の下世界音楽祭、2013コレカラ商店、2015稲武・ヒトキ、旭・木かんしゃ等)「平成の大合併」も圏域4市(恵那市、豊田市、岡崎市、西尾市)で進んだ。とりわけ山村などでの行政サービスの考え方が重要な要素となり、その中で足りない役割を担う活動も展開されてきたと感じる(上矢作 福寿の里など)。山村への移住・定住促進を担うのが、恵那・串原のNPO奥矢作森林塾(2006設立)を筆頭にいくつか。里山の魅力を発信しながら、移住者への細やかな支援を展開している。豊田市での山村拠点となるコアセンターは、2013年の次の時代まで待たなければならない(おいでん・山村センター)。岡崎市は額田町との合併により、乙川流域圏全域を取込めたのであるが、これを十分まちづくりに活かせるかどうかは今後の鍵となる。

奥矢作森林塾(小林さん、大島さん)とサトノエキカフェ(恵那・串原)



サトノエキカフェにて 京都から移住された家族のお子さんは、ここに来て人懐っこくなったという



豊田・稲武の「ヒトキ」



福寿の里が運営を任されている 恵那・上矢作の「モンゴル村」

矢作川流域圏での運動・活動の歴史と流れを考える ④ 矢作川流域圏懇談会の時代へ ～ 「事例集から見た矢作川流域年表」、「矢作川流域圏年表」を読み解く ～

そしていよいよ、2010年8月に矢作川流域圏懇談会が始まり、さらに10年を経た。

【3】2010年～ 矢作川流域圏懇談会「山・川・海 流域一体で川づくり」(国交省豊橋河川事務所の運営)

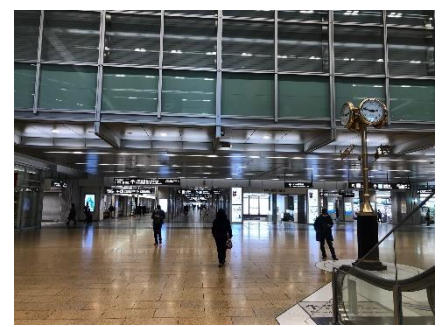
懇談会が開始された初年度、2011年3月に東日本大震災の衝撃が襲った。以降10年間、わが国は実に様々な災害が頻発し、2020年現在も新型コロナウイルスの脅威が世界中を席卷している。これから大きく価値観や生き方が変わろうとしているのかもしれない。愛知県、矢作川流域ではこの間大きな災害が発生しておらず、逆に十分な危機感を持っておく必要もあろう。



2011.3.11 東日本大震災



2018.9.6 北海道胆振東部地震の爪痕



2020.GW 新型コロナ緊急事態宣言の下、ほとんど人がいない名古屋駅(金の時計)

● 災害等イベント / 2011年に東日本大震災が発生、価値観は変わったか ～その後頻発する大災害

- 2011.3.11東日本大震災(死者等約2万人)、2011.9月 紀伊半島豪雨(死者等98人)、
- 2012九州北部豪雨(白川、矢部川等 死者30人)、2014広島豪雨土砂災害(死者77人)、
- 2015関東・東北豪雨(鬼怒川・小貝川決壊)、2016.4.14熊本地震(死者・関連死含め約270人)、
- 2017.7月 九州北部豪雨(福岡県(朝倉市など)・大分県 死者40人)、
- 2018.7月(広域)西日本豪雨(死者等270人 広島土砂災害、岡山・小田川等決壊、四国肱川等)、
- 災害級猛暑(7月救急搬送5万人超、死者133人)、2018.9.6北海道胆振東部地震(死者43人)、
- 2019.10月 台風19号・東日本豪雨(死者等94人 阿武隈川、千曲川等決壊)、ラグビーワールドカップ、
- 2020 新型コロナ(COVID-19)禍(7月時点で死者約1,000人以上～継続中)、
- 令和2年7月豪雨(死者等85人 九州球磨川決壊、岐阜飛騨川等)

● 矢作川水系河川事業等の動き / 2009 矢作川水系河川整備計画の策定、2010 流域圏懇談会設立、2015安永川トンネル完成、2016矢作古川分派堰完成～今後狭窄部である「鵜の首」改修(開削)へ

● 新たな市民による水辺活用・再生の動き / 活動の多様性と世代継承が進む

- 2010 NPO矢作川森林塾(裕伸夫氏) 竹林伐採は2006年から欠かさず継続
- 2012 橋の下世界音楽祭(永山愛樹氏)スタート、
- 2014 矢作川「川会議」が第14回で終了、豊田大橋下にて「矢作川感謝祭」がスタート
- 2015 乙川かわまちづくり(岡崎市)登録～乙川リバーフロント整備の推進(りた・天野裕氏)
- 2017～ 岩本川創遊会(2015小さな自然再生に向けたWS)、
- 2017～ 第4回「矢作川感謝祭」から流域圏懇談会が参加
- 2018 矢作川かわまちづくり(豊田市)登録、
- 逆にシンボルだった古巣水辺公園が閉鎖される
- 2019.5月(新)矢作川筏下り大会が試行される



乙川テラス



2019.4.29 乙川 川びらき



橋の下世界音楽祭

旧知の仲だという
橋の下・永山愛樹氏
と乙川リバーフロント
を引っ張る岡崎・りた
天野裕氏
「川は実験場だ」



矢作川流域圏での運動・活動の歴史と流れを考える ⑤ 矢作川流域圏の新時代



2019.5.5 矢作川の新たな筏下り大会を試行する新世代の面々 橋の下世界音楽祭もトヨロックも矢作川水族館も融合する

この10年での水辺での取組みについては、橋の下音楽祭やミズベリング、かわまちづくりなど多様なアプローチにより従来にない多様な世代を巻き込むようになった。水辺の再生においても、行政主体ではない市民工事による「小さな自然再生事業」が2015年より岩本川で展開され、豊田市矢作川研究所がサポートすると同時に、外部から一般社団法人ClearWaterProjectの若手達が支援、新しい風を送り込んだ。一方でもう10年以上、矢作川の竹林を伐採し続け、良好な河畔林を創造する「矢作川森林塾」(裕伸夫代表)の存在も特筆しておくべきだろう。世代継承は重要だが、退職世代も負けてはいられない。やりたいことを諦めず、ずっと自分たちが楽しみながら活動していくのも多様性であり、根羽村・天下杉の女性陣たちと共に矢作川流域圏主役の双璧をなす。

山村においても、少し前に移住、活動を始めた若者たちなどが新たな動きを模索していく。M-Easy(豊田旭地区)戸田友介氏は、2013年に「あさひ若者会」を発足、2015年に旭・小原地区で「戸田新聞店」を開業、山間地での「暮らしのシゴト」に目を向けていき、さらに2018年には旧小学校を活用した人材創造拠点「つくラッセル」を開設した。豊田市での山村拠点施設「おいでん・さんそんセンター(鈴木辰吉センター長)」は2013年に開設され、以降様々な活動や支援を展開していく。根羽村森林組合の今村豊氏は、地元根羽杉を活用したツールを様々開発し、流域圏(いや、全国)展開を図るための「木づかいライブスギダラキャラバン」を2014年から始め、各地飛び回る。2014年に岡崎市(額田)に移住した唐澤晋平夫妻は、額田木の駅などの活動を経て2018年「奏林舎」を設立した。なお、額田では2013年に岡崎森林組合バンド「岡森フォレストーズ」が結成されるなど、こちらも多様性豊かだ。

2005年に始まった「矢作川森の健康診断(矢森協主催)」は、丹羽健司氏の公約通り10年(10回)実施した後、2014年に終了した。2015年からは独自に「あさひ森の健康診断」が展開されるなど、丹羽氏がアドバイザーを担う「木の駅プロジェクト」同様、流域圏での広がり・展開を見せており、10年間の目標は達成できたと言えよう。今後は健康診断結果も踏まえ、各地域であるべき森づくりを模索するステップとなる。

- 山村での展開 / 2011~ 旭木の駅プロジェクト、2013(豊田)おいでん・山村センター開設、あさひ若者会、2013~(根羽村)木の駅ねばりん、2014根羽村森林組合「スギダラキャラバン」スタート、2014 矢作川森の健康診断が終了、2015あさひ森の健康診断実施、~額田でも2015~ 額田木の駅プロジェクト、2015(旭)農家民宿ちんちゃん亭オープン、(旭・小原)戸田新聞店、2016~(額田)間伐こもれび会、2018~(額田)奏林舎、(旭)つくラッセル開設



M-easy 戸田友介氏

- 海での変化と展開 / 2009.12月(常滑)水産海洋学会地域研究集会「伊勢・三河湾の環境と漁業を考える」での提言

伊勢湾の水質はかなり改善されてきた。きれいになったとも言える。しかしながら、沿岸・海域の多様性が損なわれ、漁獲の多様性も失われつつある。私たちは、漁獲が少量でも多様性のある海を回復する必要があり、そのことを消費者である都市の人たちに理解してもらわなければならない。また、沿岸域の管理者などに護岸など水辺空間の多様性の確保につとめるよう働きかける必要がある。(三重県水産研究所より)

2012 新川西部浄化センター供用され、愛知県内11全ての流域下水道が整備される、
2014 この頃より豊かだった三河湾のアサリが大きく減少していく(原因特定できず)、
2016 ダボス会議において海洋(プラスチック)ごみ、特にマイクロプラスチックの問題を提起、
2017~ 矢作川、豊川浄化センターでの試験管理放流(TP)の実施 ~ 経過・効果観察中



三河湾では、2012年頃ピークだったアサリの漁獲量が、2014年頃より急激に減少していく。海辺で見られる野鳥の数が激減しているとの報告も伊勢湾各地で聞かれる。海域の多様性が損なわれているのかもしれない。今後懇談会の役割は、健全な流域圏全体の指標としても海を見ていく必要があるか。